

觀世音菩薩について

逸 見 梅 榮

觀音様に就て、御話して見たいと思ふ事が、澤山に御座いますが、私は、佛像等の研究に従つてゐます爲か、よく、觀音様が神様か佛様か、或は男性か女性か、又、觀音像には、ドノ位の種類が有るか、ドノお姿が本當のものか等、色々な質問を受ける事があります。この様な質問は、恐らく、彫刻や繪畫の、觀音像をご覽になつたり、又色々な觀音様の名前をお聞きになつて、起された疑問と存じますが、こう云ふ様な質問に、お答へするつもりで、お話を進めて見たいと存じます。

先づ第一に、觀音様は佛教の正しい唱へ方からしますと、佛様でも、神様でもいけませんで、菩薩と申さねばなりません。佛教では、拜まれます方々を、大きく分けまして、佛と、菩薩と、明王と、諸天の四つと致します。この四つを、詳しく申上げる必要も、又時間の餘裕もございませんから、極めて簡単に申しますと、佛は、已に悟られた方で、例へば、大日如來とか、阿彌陀佛とか唱へて、名前の下に、佛とか、如來をつけて、お呼びする方があります。次の菩薩は、菩提薩埵の略した呼び方でありまして、まだ佛にはなりません。佛になる事を、理想目的にして居りますと共に、一方、吾等衆生を救濟せんと、常に、努力精進を、續けてゐられる方を云ふのです。又、不動明王とか、愛染明王と云ふ様に、明王

と呼ばれる方は、一通りの手段では濟度し切れない頑迷な者共を、恐ろしい姿で以つて、先づ調伏してそれから導いて下さる方であり、最後に梵天とか、帝釋天とか、聖天とか、水天宮と云ふ様な方は、佛教を守護する神様でありまして、これは諸天の部類に入るのであります。

扱て觀音様はこの四つの中の菩薩であります。従つて、阿彌陀如來の淨土に於きましては、一生補處の菩薩、言葉をくだいて申せば、もう一階段で、佛になられる地位、云はゞ、佛の第一候補者でありますと共に、その大慈悲の力に依りまして、吾々衆生を救濟せんと、常に願つてゐられます。この衆生を救ふ手段方便として、色々な姿に形をかへて現はれるので、若し必要とあらば、この世の中のあらゆる一切として形を現するのが、觀音菩薩のすぐれたる力、所謂觀音の妙智力で御座います。でありますから觀音様は、男性か女性かと云ふ問題は、自然に解けて參ります道理で、衆生濟度に都合のいゝ性を取られ、男性ともなり、女性ともなると、申すのが妥當であると存じます。尤も、觀音の原名は、梵語で、Avalokiteśvara と申し、男性名詞でありますから、言葉の上から詮索すると男性で御座いますが、前申上げた様な理で、必ずしも兩性の中の、ドレか一つに、決めなければならぬと云ふ理由は有りません。事實、後程申上げる諸觀音の中にも、例へば、准胝觀音、多羅觀音、白衣觀音の様に、女性の觀音様が少くないのであります。

今、觀音の原名を申しましたついでに、別名や、お住居の事をつけ加へませう。原名の、Avalokiteśvara を翻譯致しまして、光世音、觀世音、觀自在等御座います。ドレも皆結構な名前であります。此等の中で、觀世音略して觀音と唱へるのが最も一般的であります。觀音又は觀世音が、かくも普遍的になつたのには、理由のある事でありまして、それは觀音菩薩の事を書いてゐるお經で、最も多く讀まれた所の法華經普門品に、觀世音の名稱を用ゐてゐるからであらうと

思ひます。

蓋し觀世音、觀音と云ふのは、若し多くの衆生が、諸々の苦しみを受けます時に一心になつて、菩薩のみ名を稱へ奉ると、菩薩は立ちどころに、衆生の聲をお聞きになつて、皆解脱を得さして下さると云ふ事から、音を觀ずると云ふのであります。

觀音様には、尙此等の直接翻譯から來た名前の外にも、色々な名前があり、その多くはこの菩薩の徳から出てゐるのであります。例へば、大慈悲を興へて下さるから大悲聖者、又、一切苦難の救濟者でありますから、救護苦難者と呼び、又、如何なる恐怖の中に於ても、吾等衆生をして恐怖無からしめるから、施無畏者と申上げ、圓通無礙の徳によつて、圓通大士とも呼ぶのであります。又、海路の安全を司られるから慈航大士とも唱へます。

尤も、この航海を慈む慈航大士と云ふ名稱は、觀音の住所である普陀落伽、海岸にある事に關係があらうかと存じます。一體普陀落伽と申すのは、梵語のポーターラカの音を移した言葉で、印度のドコにあるかと云ひますと、玄奘三藏は、南印度秣刺耶山の東海岸にあると述べ、且つその山を形容して、道が甚だ險しく、巖石のそば立つた山である。頂山には、池が有つて、その水は鏡の如く澄み、その池から流れ出る大きな川は山を圍つて、そして南海に注ぐのであるが、觀音菩薩の宮殿は、池の畔ほとりに立つてゐると云ふのであります。但し、現代の印度地圖に合せまして、こゝが普陀落伽であるかと、判つきり申上げる事の出来ないのが遺憾で御座います。兎も角、印度の普陀落伽が、南方の海岸にあると云ふ事から、支那や日本に移した普陀落伽も、南方の海岸に設けられまして、支那では浙口省の寧波から、五十哩の北東、舟山列島の中にありますし、日本では、御承知の通り、日本の南海である紀州熊野の那智山が、普陀落伽となつて居ります。然

し、不幸にして海の無い西藏にも、観音の住所たる普陀落山はあるのでありまして、都のラツサが普陀落山と、云ふ事になつてゐます。それは法王の唵喇摩が代々観音菩薩の化身であると信ぜられてゐるから、その住所である宮殿は取も直さず、観音菩薩の宮殿と云ふ事になる理であります。

以上、観音の名前や住居を申し上げましたが、菩薩は敢て普陀落山ばかりに居らるゝのでは有りません。西方極樂淨土では、勢至菩薩と共に、阿彌陀如來の協待として、佛の國土にも居られゝば、又この世界に現はれまして、上は佛より人間界では國王大臣から一般庶民、なほ下つては、夜叉阿修羅の如き人間以外のものに至る迄、所謂三十三の應現身を現ぜられるのであります。應現身とは本體は觀音様でも菩薩の姿でない姿で、三十三通りにあらはれる事を申すので、菩薩はこの應現身の形に於ても、菩薩本來の念願を實行して居られます。

觀音菩薩本來の念願とは大慈悲でありまして、吾々人間の困苦難を救ひ、そして解脱を得さして下さる事であります。吾々人間の困難、難儀、それには色々あるであります。觀音經では、火の難儀、水の難儀、惡鬼や、羅刹の難儀、刀で切られ杖で打たれる難儀、鎖でしばられる難儀、或は、賊におそはれる難儀等、凡そ七通りの、難儀を擧げて居りますし、印度の觀音像に、菩薩が十種の難儀を救つてゐられる所を、刻つたのを見た事もあります。難儀の數は、ドウでもいゝでせう。要するに、斯様な外部から來る一切の難儀は、悉く觀音様の慈悲に依つて取除いて戴く事にすると共に、吾等の心の中に巢をかまへて、吾等の成道、即ち宗教的人格の完成に、邪魔をする所の、貪り、瞋り、愚痴の三毒をも、取除いて戴く様に、祈念すべきであると存じます。

斯様に、菩薩の念願は、佛教の根本である慈悲を、眞向に振りかざしてゐられますから、それでこそ、觀音様には何と

なく甘へて、母親にねだると云つた氣持で、おすがりが出来るのだと思ふて居ります。

所で、この慈悲の示し方に依りまして、當然、菩薩の姿にも變化が起り、その變つた一つ一つに違つた名稱が付けられて、茲に多くの觀音菩薩が出現して參りました。これが色々な名前の觀音様が出來た理由であります。

色々な觀音様を分類して眺めるのに、お經に書かれてあるか、無いかと云ふ事からするのが便利であります。吾國に、よく知られてゐる六觀音と云ふ一團に入つてゐる方々は、お經の中に見える菩薩であります。六觀音の數へ方は眞言宗では聖觀音、十一面觀音、千手觀音、馬頭觀音、如意輪觀音及び准胝觀音で、天台宗では准胝觀音の代りに不空縹索觀音を入れて居る様であります。尙、この六觀音以外の觀音様で例へばよく掛物等にかゝれます白衣觀音等も矢張りお經に見える觀音様であります。

お經に、書かれて無い觀音様、これに二通りありまして、一つは直接書かれて無くとも、お經の説を土臺として出來たもの、二は全然お經の説に關係の無い觀音であります。俗に三十三觀音と云ふ一團は、お經に書かれてあるのや、又無いのや雑多な衆合でありまして、揚抑觀音とか、魚藍觀音は、菩薩の持物の方から、又、徳王觀音とか、延命觀音等は、菩薩の一つの徳から、遊戯觀音とか、合掌觀音等は行住坐臥の所謂の姿の方から來てゐると思ひます。而も、三十三觀音の中には、岩戸觀音、或は瀧見觀音等の如く、ドウも日本出來らしい觀音様が居られる事は、大變面白い事だと存じます。

觀音様の、色々な名前を、申上げて居つたんでは、際限ありません。尼波羅では百八觀音の名が數へられてゐる程でありますからこの邊で止めますが、此等の諸觀音は、皆それ／＼違つた姿であらばされて居ります。でありますから、ドノ姿が、觀音菩薩の本來のものかと云ふ事を云ひ得ないのであります。一つ一つの觀音に就てのみ、コウ云ふ姿であると

云はねばなりません。そして、それらの姿を取つたのには、皆それ／＼の理由があるのであります。即ち菩薩本來の本願の示し方、尙それに神話等も加はりまして、色々と面白い變化をあらはして居ます。一二例を、申して見ますと、左の手に蓮華を持ち、右手で開く様な姿の聖觀音は、吾々の清淨なる心性の蓮華を開いて下さる爲であり、馬の頭を頭にいたゞき、恐るべき顔をしてゐる馬頭觀音は、普通の姿では調伏し切れないものを、濟度する表現であります。又、神話が加はつた例は、十一面觀音や、青頸觀音の場合でありまして、十一面觀音の十一面は、教理的には十一通りの無明煩惱を退治する意味であります。嘗て、頭を十箇持つて威張つて居た、羅刹を征伏する爲に、觀音様は一つ多く十一面を現じた。と云ふ神話が付いてゐるのであります。又、青頸觀音は、青い頸と書きますが、その頸の青い理を申して見ますと世界の最高神である自在天濕婆神が、世界創造の際に涌き出た猛しい毒を皆の爲めに取片付けてやる爲にこれを呑み込みました。所が夫人のパールバティ、これはヒマラヤ山の娘でありますがこの夫人が夫の一大事とばかり大に驚いて、兩手で首のところを押へて胃に毒が行くのを止めましたが、その毒がそこに止つて頸が青くなつたと云ふ話であります。青頸觀音はこの神話をうけついで居るのであります。色々な觀音様の姿を教理から、又この方面から觀察しますのも面白い事に存じます。最後に、觀音信仰の有様を少しく申上げませう。觀音菩薩の名前が、支那に始めて知られましたのは、今から千八九百年の昔でありますから、印度では少くとも二千年前には、知られてゐたと存じます。觀音様が像として作られたのは判然とはしませんが、千七百年位前であらうと思ひます。と云ふのはその頃の印度犍陀羅の彫刻に、觀音像と思はれるものがあるからであります。下つて第四紀の末、法顯三藏が印度に行つた時には、觀音信仰は相當盛んであつた形跡が有り、それから二百年後、玄奘三藏の時は、印度到る處に觀音像が建てられ、その信仰が仲々盛でありました。而も、兩

三藏自身が熱烈なる觀音様の信者であつたと云ふ事が支那に於ける觀音の信仰状態をも示す事になるのであります。法顯三藏の印度各地を巡りましたのは、支那人としては、ほとんど最初でありました、當時印度人から、甚だ珍らしがられ、「奇なる哉邊國の人、能く法を求めて此に至る、我等の諸師和上相承以來未だ漢道人の此に至るを見ず」と驚かれた時代でありまして、三藏は、十五年の長い間、印度を遍歴し無事本國に歸りました。この無事に歸つた事に就て、法顯三藏は、實に觀音菩薩の加護に依る所であると信じて居ります。

三藏は、印度よりの歸り路はセイロン島より小舟に乗つて怒濤逆捲く、ベンガル灣の大浪に苦み、漂着した島々の蠻人や、野獸におびやかされましたが、苦難に遇ふ毎に、専ら觀音菩薩を念じて無事なるを得たと自ら誌して居ります。

玄奘三藏とても同じ事でありまして、觀音菩薩の加護の下に幾多の危難を免れ、十七年の印度遍歴に依つて法を求めお經を集める大願を果したのであります。

御承知の如く、玄奘三藏は、大般若經六百卷の如き大部のお經をはじめとし、澤山のお經を翻譯しその量に於て、又質に於て、佛教經典翻譯界の第一人者であります。その取扱つた經典の思想方面から申せば、理論方面のものが多く、又三藏の學問から見まして、矢張り理論方面を取扱つて居りますので、一寸想像した所では、理論一點張りの方の様に、想像されます。所が、三藏は熱烈なる觀音様の信者でありまして、自分を全部觀音様の前に投げ出してひたすら菩薩の加護の下に行動してゐられた事が傳記に見えて居ります。こゝに、三藏の宗教家として偉大さが見られ、たゞ語學に堪能な翻譯家でも無ければ、議論を好む只の論士でも無かつた事が解るのであります。

私は只今法顯玄奘兩三藏を例にとりまして、兩三藏が熱心なる觀音信者であつた事を申述べましたが、支那に於ける觀

音信仰は敢て僧侶階級にばかりあつたので無い事は勿論で民間に於ける信仰の益んなる事は非常なものでありました。觀音菩薩の靈驗を書いた本も澤山に御座います。

我が日本に於きまはしは恐れ多い事ながら、聖德太子は夢殿に觀世音菩薩の像を安置せられ、朝夕天下泰平國家安康國民福を祈願いたされましてこの方、觀音信仰は鬱然として社會の各層に培はれ來つたのであります。

蓋し奈良朝平安朝の佛教は外見甚だ貴族佛法らしいのであります。深遠なる佛教教理は當時の教育普及程度より見て貴族より了解出來なかつたかも知れないし、又廣莊華麗なる殿堂の建設、佛像の寄進等は平民の手にならなかつたかも知れません。然し乍ら觀音信仰に關しては斷じて貴族の獨占では無かつた様に考へます。これが證據は觀音靈場の開設であります。聖武天皇の神龜年中に西國三十三ヶ所の開設を見て以來、各地に西國の例にならひ三十三ヶ所の開設があり、觀音菩薩と上一般民血とか堅き因縁を結んだのであります。上は花山天皇様の如く西國三十三ヶ所の靈場を、かたじけなくも、玉歩を運ばせられた例もありまして、一般民衆の觀音信仰は愈々盛んになり尙各地にそれ〴〵因縁を持ち玉ふ觀音靈場の開設と相待つて今日に及んで居ります。

實に千三百五十年前、佛教渡來この方、我々の祖先は觀音菩薩の本願の妙智力を光明と仰ぎ力とたのんで、個人としては、人生の荒浪と戦ひ、民族としては光輝ある日本文化を建設し來つた次第であります。將來も正に斯くありたいものと望んで止みません。